

第5回国会等移転課題別講演会要旨

1. 日 時 平成12年1月20日(木)午後1時30分～3時
2. 場 所 栃木県自治会館
3. 参加者 200名
4. 内 容 「首都機能移転新都市に求められる新都市像」

〔ヨーロッパの都市の特徴〕

- ヨーロッパの文化は、キリスト教、一神教の文化。神・人間・自然というヒエラルキーが極めて明瞭である。都市の作り方も、自然を打ち負かして、自然の対極である建物や道路などの人工構造物を自然の上に建てるという思想に基づいている。
- 神が真ん中において、あまねく全世界を照らすという文化であるから、中心性が明確。教会や、宮殿、大統領府や国会を街の真ん中に置き、それを規範に据えて都市をつくる。道路は当然、その中心に向かってつくってある。
- 一神教は、時間が直線的に流れるという思想だから、永遠の生命と、永遠の死の2つに分かれる。当然、誰でも永遠の生命、不変性を望む。したがって、建物は、石やコンクリートなど非常に耐久性があるのが特徴。これがヨーロッパの都市の根本思想。ヨーロッパの文化に基づく独特の都市文化である。

〔日本の都市・農村の特徴〕

- 日本はもともとキリスト教の思想、価値観を持っていないのに、今の日本の都市は、表面的にヨーロッパの都市の真似をしている。
- 明治以前の日本の文化がつくってきた日本の都市は、ヨーロッパの都市と全然違う。日本は、時間が循環するという思想で、壊れたらまたつくればよいという文化。江戸は大火が多く、頻繁に建物が燃えてしまうのに、不燃化をしなかった。理由は日本の宗教観と極めて密接に関係している。日本の宗教的な文化の根本は、命が循環する、つまり、死と再生を繰り返すという思想。都市全体としては、ときどき燃えることで再活性化される。こういう思想が、日本には強くある。不燃でない、耐久性が強くない建物は、臨機応変に変えやすい。柔軟に変革しやすい柔らかい都市である。これが大事なポイント。
- 江戸は富士山に向けて意識的に街路をつくった。江戸に限らず都市をつくる時に都市の規範に据えたものは、都市の外にある自然物。「自然と人為の一体化」、これが非常に大事なキーワード。どこに行っても山や海、川が緊密で、都市と周辺の自然との一体感が実に強い。人間が意識的に自然と良好な関係を結ぼうという強い意志がある。自然を一方向的に征服するのではなく、自然を尊重している。自然を街づくりの手がかり、規範に据えて、道や土地利用を構成している。
- 日本では大事なものは真ん中ではなく、「奥」、端にある。人間がつくる人工物が威張らず自然と協調している。
- 農村も、ヨーロッパは牧草地の文化だから、微地形を無視できる。日本は、人間が平坦なところに住むとお米の収量が減るから、水田よりも小高くなったところを選ぶ。平らな水田と、山と、人間が住

むところと、地形によって土地利用が決まる。微地形を丁寧に読んで、地形を尊重することが日本の文化のアイデンティティ。自然とよく応答しながら、一緒にやっという文化である。このようなことは、ヨーロッパの文化ではあり得ない。

- 日本の伝統的都市の特徴は、一神教で自然を克服する文化ではなく、多神教で自然崇拜の文化であることが基層にあって、神も人間も自然も同列である、人間は自然を征服するのではなく自然と仲良くやるという考え方が非常に強い思想。

〔首都機能移転新都市に求められること〕

- 新しい都市像をつくる時のポイントは2つ。1つは、国同士が対等につき合うには、お互いに尊敬できることが一番大事である。国同士にとっての尊敬とは、その国がどんなに個性があり、豊かで、実りある文化を持っているかということ。ヨーロッパの国々は、それぞれ個性がある。しかし、20世紀の日本の都市は、ヨーロッパの都市の真似をしてきたから、日本の文化の独自性を都市で示すことが欠けている。これを示さないと、国際社会の中で一人前の国にならない。
- 新首都の非常に大きな役割は、1つは、日本はヨーロッパと全然違う文化を持っている国だということを示すことである。もう1つは、20世紀のヨーロッパが築いてきた都市の文明では、地球環境問題など新しい課題に対応できなくなっている。大きく変革させる都市の提案は、ヨーロッパではもうできない。それはほかの文化からしか生まれない。この21世紀の世界的課題に対する解決の提案をヨーロッパの文化と違う日本から行うことがとても重要な使命。世界に対する新しい都市文明の提案が、21世紀の世界を救うと思う。
- 日本の新しい首都を構想するとき、地形と一体につくる日本の都市の考え方でいくと、どういう地形のところに置くかで、首都像がほぼ決まる。どこに置くのかが非常に大事。
- 都市演出が大事。ファーストインプレッション、印象を強烈に植えることが大事。パリはこういう街かというのは、凱旋門とエッフェル塔とセーヌ川を見ればわかる。
- 今度の日本の新首都は、山水構造、つまり自然と人間の営為が一体化して、それが印象深く来訪者の心に刻まれる都市でないといけな。例えば那須であれば那珂川と茶臼岳、大佐飛山、高原山など秀峰が、大骨格。それが同時に街の中に同じような形であることが大事。これをフラクタルという。フラクタル構造とは、ある1つのパターンが小さくなったり、大きくなったり、自在に大きさを変えながら、繰り返し現れること。茶臼と那珂川が、住宅地の中にも同じように現れるということ。
- 栃木・福島の新首都候補地はまさに、山水と一体になったヨーロッパにはない都市をつくるのに絶好の場所である。
- 那須の候補地には、ぜひ大水面を造ってもらいたい。国会都市の対岸に役所とか大使館が並んで、外務省に行くときにイギリス大使館からヨットやクルーザーで行く。世界の都市にない極めてユニークな外交都市になる。外交は非常に重要であるから、そういう演出が非常に重要。
- ビジュアル・プレゼンテーション、見えるように紹介することも重要。国会に行かなくても、鉄道や道路から見える。道路の正面は非常に印象深い。道路の正面に山が見えるようにすると、この道路を通るといつでも見える。水も印象深い。建物の後ろに山があって、対岸から山と水と人工物の都市が一体になっているように水面に映り込む。これも1つのポイント。

- 代表景による都市紹介も大事。自然と人為の一体化した様子が、絵はがきになるような代表景を意識してつくる。
- 微高地をつくり、建物を一体にすることを提案する。既存地形は尊重しなければいけないが、それでは何も手をつけられない。壊れた分、新しく地形を創造する。湖を掘って、その残土で微地形をつくるというのは、まさにこの考え方。地形の再編集。松平定信公が造った白河の南湖をぜひ参考にしてほしい。
- 場所性の表現としての森林樹木も大事。ヨーロッパの都市植栽と、日本の伝統的な都市植栽は全然違う。日本のもともとの都市植栽に街路樹という発想はない。街路樹は、ボリュームで勝負。1本1本の木に意味がない。日本の伝統的な植栽の特徴は、一里塚に植えられた松。一里塚は小さくて見えないが、一里塚の脇に植えた木は遠くからでも見える。非常にシンボリック。都市の利用上の要所へ、その場所が大事だと強調したり、明示するために木を使う、これが日本の文化である。
- 芦野の遊行柳は、日本の誇る非常に優れた文化である。遊行柳は、茫洋と広がる田んぼを分ける意味がある。つまり、芦野の集落は、芦野の盆地の引っ込んでいるところにあるから見えないかもしれないが、向こう側に山懐に抱かれて芦野の集落がある、これを手がかりに見てください、ということ。「空間認識装置」と私は呼んでいる。木を手がかりに空間を認識する。これはヨーロッパにはない、日本ならではの植栽の考え方。那須にはこの遊行柳があるので、新首都を構想するとき、ぜひ参考にしてもらいたい。
- デザインの成熟は、一番最後になったら、避けて通れない。大きなコンセプトの構想とか大きな都市計画から、ディテールのデザインに至るまで、ありとあらゆるデザインが入ってくるが、全部今までの日本を超えるレベルのものを提案しないと、なかなか全国民を納得させることはできない。
- 実は新首都づくりは、単に絵柄を描くという話ではなく、今の日本の抱えているさまざまな問題を同時にどうやって解決するのかということである。今のいろいろな基準などを見直し、自己責任という考え方に転換しなければならない。そうしないと本当にいい都市は作れない。例えば、東京の竹芝埠頭にあるベンチは立派なベンチだが、座ると、柵しか見えない。柵はない方がいい。しかし、今の日本で言うと、柵を付けざるを得ない。都市を楽しくなくしているこのような様々な縛りを、21世紀の新首都をきっかけに変えられるか、かなり切実な問題である。そこまでの覚悟があるか、そこまでの提案がつかれるかということである。
- 大事な提案を1つ。新首都は数十年かかる、その間に、都市計画や自然との調整の仕方、タウンのディテールデザイン、都市運営など様々な専門家を作らなければいけない。例えば栃木・福島景観大学を作って首都をどう作るか第一級の研究と、人材育成の教育もする。そのぐらい気宇壮大に色々なことをお考えいただきたい。
- 首都機能移転は、21世紀の日本の命運を左右する大プロジェクトである。しかし、国民は無関心。どうしてか。新首都の都市イメージ、「都市像」が明確でないことが実は一番大きな問題。どんな都市ができるのかわからないと、国民には極めて理解しにくい。したがって、早くどんな都市ができるのかを示すことが非常に重要である。そのときに20世紀のヨーロッパの都市を全く超えるものを作らない限り、共感は得られない。東京と同じようなものを作るのでは、それだったら東京をもっとうまく使いましょうという話になってしまうというのが、私の話したかったことである。